

評論 (Review)

## 1980年のイタリアのオペラ界事情

——ミラノ・スカラ座若手団員としての出発点——

**Circumstances of the opera production in Italy in 1980:  
Beginning of carrier as the Milan Scala Theater of young  
person member**

二神 二郎\*  
FUTAGAMI, Jiro\*

キーワード：イタリア，国際オペラコンクール，オペラ・デビュー

Key words : Italy, International opera contest, Opera debut

### 1. 友情 (amicizia)

2017年3月，ミラノ・ヴェルディ音楽院ダニエーラ・ウッチェッロ教授の招聘を受けミラノ・ヴェルディ音楽院を訪問した際，1980年にアレッサンドリア市立歌劇場でのオペラ公演で共演した出演者達に再会することができた。我々はこのオペラ公演のキャスト選出のために行われた国際オペラコンクールの優勝者達であった。すっかり年を重ねた彼らと懐かしい時間を過ごし，若き日の音楽体験の日々を振り返ってみたいと思うようになった（写真1）。



写真1. 左 Stelia Doz 右 Danila Uccello

## 2. アレッサンドリア国際オペラコンクール (Concorso Internazionale Alessandria per i giovani cantanti lirici per l'Opera)

日本で開催される声楽コンクールのほとんどが、個人の演奏能力や音楽的表現等を評価することを目的としたものであるため、オペラコンクールがどういう趣旨のものであるか説明したい。オペラの本場イタリアでは、声楽コンクールとは別にオペラコンクールがしばしば開催される。このオペラコンクールは、あらかじめ公演を行うオペラの演目を決定したうえで、その演目の役柄にふさわしい歌手を募るものである。またこの種のコンクールは歌劇場が才能ある若き歌手を発掘するという目的もあり、若手の歌手にとっては実際のオペラの舞台を経験できる貴重なチャンスであるとも言える。直接歌劇場のオーディションにのぞんでも、日本人というだけで門前払いを受けることが普通であった当時、イタリアに留学しオペラ歌手を目指していた私にとっては、自分の実力を評価してくれて、それがそのままオペラ出演につながるオペラコンクールは絶好の機会であった。

1980年、ミラノから南西に約90キロの距離にある人口10万人ほどの小さな町アレッサンドリアで国際オペラコンクールが行われた。その名のとおりこのコンクールは、前述したオペラ歌手を募集する類のコンクールであった。通常のオペラコンクールは歌手のみを選抜するものであるが、このアレッサンドリアのオペラコンクールは、歌手のみならずオーケストラ、副指揮者、コレペティトゥーア、舞台、衣装等、オペラ公演に携わるすべての分野の人材を選抜するという、異例のコンクールであった。

当時イタリアには、専属のオーケストラ、合唱団、バレエ団等を擁する歌劇場がミラノ・スカラ座を始めとして13あり、これらのいわばファーストクラスにランク付けされる歌劇場では、外国人歌手も実力さえあれば出演することが可能であった。しかし当時はパルマ王立歌劇場などの19の地方歌劇場や、Rai（イタリア国営放送）の4つのオーケストラ、合唱団、11の地方シンフォニー・オーケストラ等においては、基本的にはイタリア国籍を有する者に対してのみ門戸が開かれている状況であった。そのような時代に、アレッサンドリアではこのコンクールを契機に新しいオペラ界を担う若き才能を発掘して世に送り出し、またアレッサンドリアの地を音楽の才能あふれる若者達の中心地にしたいという思いからこのコンクールが企画された。

## 3. コンクール (selezione)

コンクールはオペラ公演の行われるアレッサンドリア市立歌劇場で行われた。コンクールに指定された演目は、W. A. Mozart の *Così fan tutte* 「コシ・ファン・トゥッテ」と G. Rossini の *Il barbiere di Siviglia* 「セヴィリアの理髪師」の2演目であった。

歌手にはソプラノ、テノール、バリトン等の声種があるが、それぞれの声種は例え

ば *leggero* (軽い), *lirico* (抒情的な), *drammatico* (ドラマティックな) 等の声質によってさらに細かく分類される。このように声のタイプを細分化することにより、自分に演奏できるオペラの役柄はおのずと決まってくるものである。私はコミカルなキャラクターでありながら抒情的な表現も求められる「コシ・ファン・トゥッテ」のフェランド役に挑戦することにした。

コンクール参加者は世界中から集まった約70名であった。コンクールは、予選 (*eliminatória*), 準決勝 (*semifinale*), 決勝 (*finale*) と3回に分けて進められながら、決勝ではおよそ20名くらいに絞られた。各選考段階では、次のような演奏課題が与えられた。

予選：各自が任意に選んだオペラアリア (公演演目以外のオペラ作品から)

準決勝：出演を希望する演目のオペラから選択したアリア

決勝：公演演目から指定された二重唱, 三重唱

決勝の二重唱, 三重唱は、決勝に残った複数の選抜者と演奏を行い、その際お互いの声のバランス等も考慮され、本番の舞台を具体的にイメージできる選考が行われた。一週間ほど続いたコンクールの間、お互いの演奏を聴いたり、重唱の練習、意見交換などをするうちに、すでにコンクールの受験者たちとはほとんど友情と呼べるような感情が芽生えはじめており、彼らとぜひオペラを一緒にやりたいと強く思うようになっていた。そして私は幸運にもフェランド役で1位を獲得することができた。

#### 4. 稽古 (*laboratorio*)

コンクールが終了した約2カ月後、オペラに選出された歌手たちは再びアレクサンドリアに集合し、本番に向けて1カ月ほどの稽古が始まった。稽古は、主に歌劇場の練習場などを使用して行われた。音楽稽古では、ピアニストとの譜読みから始まり、ピアノ伴奏での通し稽古、指揮者との音楽づくりが進められ、次に役柄のキャラクターを演出家と打ち合わせしながら台本の読み合わせが行われ、立稽古、オケ合わせへと進んだ。

このオペラ稽古では、私の音楽人生において大きな影響を受けた二人の偉大なマエストロと二人の天才ピアニストに出会った。それが *Maestro Edoardo Müller* と *Maestro Filippo Crivelli* そして *Vincenzo Scalera* と *Carlo Rizzi* であった。既にスカラ座で正指揮者の地位にあった *Maestro Müller* との稽古では、いつもイタリアの歌劇場で上演されるモーツァルトに物足りなさを感じていた私に、オーストリアの、ある意味杓子定規で堅苦しさを感じる音楽に、自由奔放で明るく開放的な、いわばイタリア的表現とをバランスよく融合した、それまでに触れたことのない新鮮な音楽を味あわせてくれた。おそらく *Maestro Müller* がトリエステ (イタリアとオーストリアの国境近くの町)

の生まれであり、地理的にも文化的にもオーストリア、ウィーンの影響を多分に受けて育ったことから、モーツァルトの音楽を真に理解し、そのうえに彼独自の表現や解釈を加えた演奏を実現できたからであろう。

また演出家として活躍していた Maestro Crivelli との稽古は、発想の斬新さ、そのセンスの良さに感動の連続であった。彼は著名な演出家 Franco Zeffirelli のもとで長年助手を務め、彼から多くのことを学んだと話してくれた。二人のマエストロの略歴である。

#### 音楽監督兼指揮者：エドアルド・ミュレル (Edoardo Müller)

トリエステ生まれ。ミラノ・スカラ座、フィレンツェ市立歌劇場他、多くのイタリア及びヨーロッパの歌劇場にて主にベル・カントオペラを指揮し、メトロポリタン歌劇場では22年間に146回の公演を行い、サン・ディエゴ・オペラハウスでの出演は31年に及ぶ。ピアニストとしてもレナータ・テバルディ、カルロ・ベルゴンツィ、ホセ・カレーラス、モンセラ・カバリエ他と共演。

#### 演出家：フィリッポ・クリヴェッリ (Filippo Crivelli)

ミラノ生まれ。著名な演出家フランコ・ゼッフィレリの助手を務め、ミラノ・スカラ座、ナポリ・サン・カルロ歌劇場、ローマ・オペラ歌劇場、ヴェローナ野外劇場等のイタリアの主要歌劇場や、パリ・オペラ座、メトロポリタン歌劇場など世界各地の歌劇場で演出を手掛けた。バロックからベル・カントオペラに至るまで、200以上のオペラ演出のレパートリーを誇り、1993年ドニゼッティ賞を受ける。

優秀なピアニストの伴奏でオペラ稽古が進められたが、その中に衝撃を受けるほどの二人の優秀な副指揮者兼ピアニストがいた。ピアニストとしてのテクニックが素晴らしいのは当然だが、全ての役柄のパート、セリフを暗譜で弾くコレペティトゥアに出会ったのは、後にも先にも Carlo Rizzi だけであった。今ではオペラの世界で知らない人はいないほどのマエストロに成長した Vincenzo Scalera と Carlo Rizzi の若き時代に、彼らと一緒に仕事が出来たことはこの上ない幸運であった。二人の略歴である。

#### ピアニスト：ヴィンチェンツォ・スカレーラ (Vincenzo Scalera)

アメリカのニュージャージー州出身。マンハッタン音楽学校でピアノを学び、ニュージャージー州立歌劇場の副指揮者を、その後ミラノ・スカラ座の副指揮者兼ピアニストを務める。エジンバラ音楽祭、オランジュ音楽祭等数多くの著名な音楽祭に出演。一流音楽家のリサイタル伴奏者として共演者の強い信頼を受け世界各地で活躍しており、常に高い評価を受けている。ミラノ・スカラ座アカデミーにて、2002年よりオペラコース、伴奏者コース等の講師を務めている。

### 指揮者：カルロ・リッツィ (Carlo Rizzi)

ミラノ生まれ。ミラノ・ヴェルディ音楽院で学び、パルマ国際指揮コンクールで第1位。イギリス・ロイヤル・オペラハウスやボローニャ市立歌劇場など欧米各地の歌劇場で定期的にオペラの指揮者を務める。1992年から2001年、2005年から2007年までウエールズ・ナショナル・オペラで音楽監督を務める。2005年のザルツブルク音楽祭にて、急死したマルチェッロ・ヴィオッティに代わり、ヴェルディ作曲の「椿姫」を指揮し大成功を収めた。

## 5. オペラ公演 (recita)

1980年9月13日、オペラ公演は満員の聴衆のなか、アレッサンドリア市立歌劇場で初日を迎えた。オペラ「コシ・ファン・トゥッテ」は6人のソリストによるオペラである。6人のソリスト達はイタリアの北西部トリエステ、南部シチリア、北部ミラノとノヴァーラそして日本から集まった。

女声の3人は共にソプラノであるが、それぞれの役は *leggero*, *lirico*, *drammatico* と求められる声の質が異なる。フィオルディリージ役の Stelia Doz はドラマティックな声で最も難しい役を見事に歌い切り、ドラベッラ役の Rita Susovsky はリリックな声で女性の揺れ動く心を表現し、デスピーナ役の Daniela Uccello は軽めの声で軽妙な役柄を演じ、観客を楽しませた。

男声の3人はグリエルモ役の Armando Ariostini はバリトンらしい張りのある美声で、フェランド役の Jiro Futagami はリリックな声で、ドン・アルフォンソ役の Mauro Trombetta はコミックなバスをみごとな演技力でそれぞれ好演し、オペラ公演は大成功に終わった。

公演前の約1か月におよぶ練習には Rai (イタリア国営放送) が常に帯同し、その様子をドキュメンタリー番組として、また初日の公演も後日イタリア全土に放映された。私以外の5人の歌手たちの略歴である。

### フィオルディリージ役：ステーリア・ドツ (Stelia Doz) ソプラノ

トリエステ生まれ。ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場、トリノ王立歌劇場、パレルモ・マッシモ歌劇場、トリエステ・ヴェルディ歌劇場、トレヴィーゾ市立歌劇場、カタニア・ベッリーニ歌劇場、ベルガモ市立歌劇場他、数多くの歌劇場に出演。現在ミラノ・ヴェルディ音楽院教授。イタリア及び世界各地でマスタークラスを行う。

### ドラベッラ役：リータ・スソフスキー (Rita Susovsky) ソプラノ

トリエステ生まれ。トリノ王立歌劇場、ボローニャ市立歌劇場、ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場、ナポリ・サン・カルロ歌劇場、パレルモ・マッシモ歌劇場他、数多くの歌劇場に出演。現在、トリエス・テタルティーニ音楽院教授。オーストラリ

ア、ベルギー、スロヴェニア、クロアチア、フランス、ドイツ他、世界各地でマスタークラスを行う。

**デスピーナ役：ダニエーラ・ウッチェッロ (Daniela Uccello) ソプラノ**

メッシーナ生まれ。ミラノ・スカラ座オペラ研修所修了。ナポリ・サン・カルロ歌劇場、フィレンツェ市立歌劇場、パレルモ・マッシモ歌劇場、プラハ・スメタナ歌劇場、ブダペスト国立歌劇場他、数多くの歌劇場に出演。現在ミラノ・ヴェルディ音楽院教授。レナータ・テバルディ国際声楽コンクール主催。

**グリエルモ役：アルマンド・アリオスティーニ (Armando Ariostini) バリトン**

ミラノ生まれ。ミラノ・スカラ座オペラ研修所修了。ミラノ・スカラ座、ローマ歌劇場、ナポリ・サン・カルロ歌劇場、トリノ王立歌劇場、フィレンツェ市立歌劇場、パレルモ・マッシモ歌劇場、ボローニャ市立歌劇場、ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場、ベルガモ・ドニゼッティ歌劇場他、数多くの歌劇場に出演。

**ドン・アルフォンソ役：マウロ・トロンベッタ (Mauro Trombetta) バス**

ノヴァーラ生まれ。トリノ音楽院卒業。オペラ歌手としての活動の他、指揮者としても「椿姫」、「ナブッコ」、「ボエーム」、「カヴァレリア・ルスティカーナ」他、数多くのオペラを指揮。トリノ・王立歌劇場、ローマ歌劇場、ヴェローナ野外劇場、カタニア歌劇場などで音楽監督を務め、28年に亘りレッジョ・エミーリアのアキレ・ペーリ音楽院の教授を務める。

ほとんどの歌手はこのコンクールがオペラ・デビューであったが、その後イタリアの主要なオペラ歌劇場に出演、その経験を活かし、今では各地の音楽院などで後進の指導にあたるようになった。まさにコンクールの主催者が思い描いたオペラ界、音楽界に貢献する人物へと成長していったのであった。

# COSÌ FAN TUTTE

Dramma giocoso in due atti - Libretto di LORENZO DA PONTE

Musica di

**WOLFGANG AMADEUS MOZART**

Personaggi Interpreti

Fiordiligi

STELIA DOZ

EWA IZYKOWSKA

Dorabella

RITA SUSOVSKY

Despina, loro cameriera

DANIELA UCCELLO

ROSANNA DIDONE\*

MARIA GRAZIA AUDANO

Ferrando, ufficiale, amante di Dorabella

JIRO FUTAGAMI

Guglielmo, ufficiale, amante di Fiordiligi

ARMANDO ARIOSTINI

Don Alfonso, vecchio filosofo

MAURO TROMBETTA

Maestro Direttore e Concertatore d'Orchestra

**EDOARDO MULLER**

Regia

**FILIPPO CRIVELLI**

Scene

**MIETTA CORLI**

Costumi

**ENRICO DUSI**

Direzione tecnica e allestimenti

**CARLO GIULIANO**

Maestri collaboratori

VINCENZO SCALERA

ALDO TARCHETTI

Maestri collaboratori

del "Laboratorio"

MASSIMILIANO CARRARO

FRANCO GIACOSA

CARLO RIZZI

Direttore di scena

**COSIMO MOLITERNO**

Luci

**ALESSANDRO CREMA**

Capo elettricista

**BRUNO CAROCCI**

Macchinisti

**GUIDO CAIMI - CALOGERO D'AGRO\* - PAOLO DRAGO**

Attrezzista

**ARMANDO LANZONI**

Sarte

**NIRVANA ANGIOLETTO - LAURA DAEDER**

Costruzioni Laboratorio Teatro Stabile Torino

**SALVATORE FORTUNA - ROMANO DAEDER - CALOGERO D'AGRO\* - GUIDO CAIMI**

Realizzazioni pittoriche

**DITTA BROGGI, Milano**

Attrezzeria Laboratorio Teatro Stabile Torino

Costumi, **SARTORIA DEVALLE, Torino**

Parrucche, **MARIO AUDELLO, Torino**

Calzature, **DITTA PEDRAZZOLI, Milano**

**ORCHESTRA DEI GIOVANI**

**DEL LABORATORIO LIRICO SPERIMENTALE 1980**

Corale Città di Acqui Terme – Coro della Schola Cantorum di Alessandria

写真2. コシ・ファン・トゥッテのプログラム

gli interpreti



Ewa Izykowska



Stelia Doz



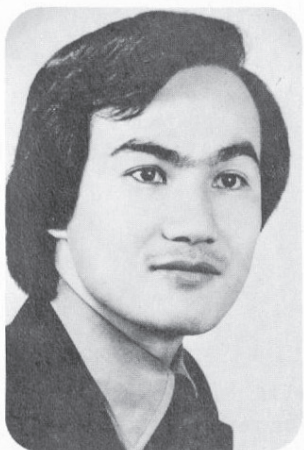
Rita Susovsky



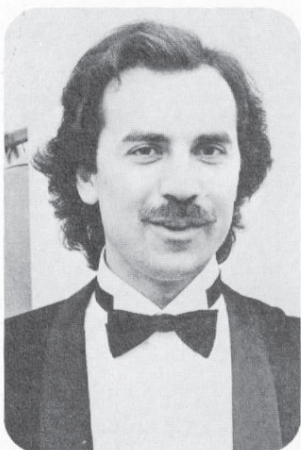
Danila Uccello



Maria Grazia Audano



Jiro Futagami



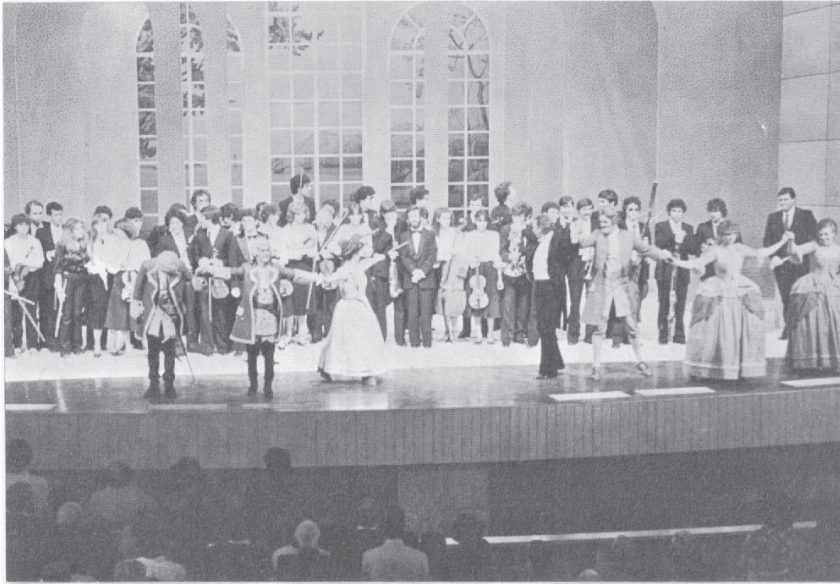
Armando Ariostini



Mauro Trombetta

写真3. キャスト





1980: l'orchestra e i cantanti del primo Laboratorio Lirico (foto sopra): ringraziano il pubblico che applaude calorosamente (foto sotto)



写真4. 舞台写真

## 6. 回想 (ricordo)

40年前、ヨーロッパはまだ遠く、日本人がイタリアの歌劇場に出演することは現在にも増して大変難しい時代であった。私が声楽コンクールに入賞した折、イタリアの新聞には「pericolo giallo」—「黄色い危険」—つまり日本人（黄色人種）に仕

事を奪われてしまう危険と題された記事が載せられる始末であった。

私はこのオペラ公演を契機に新しいオペラ出演のオファーを受けることとなり、その後イタリアで多くのオペラに出演し、オペラ歌手としての経験を積むことができた。またこの公演で出会ったソリストや指揮者、演出家らともその後何度も共演する機会を得、そのたびにオペラを通して学んだ数多くのことは、後の長きに亘る教員生活での指導の礎となった。

あの公演から40年近くが経ち、彼らのその後の活躍話を聞きながら、自分は本当に幸せな音楽人生を送ることが出来たと嬉しく思うのであった。